

オーボエ 吉井瑞穂

Oboe
Mizuho
Yoshii

甘美な音色と豊かな音楽性で世界の聴衆を魅了する国際派オーボエ奏者。東京藝術大学入学後、渡独しカールスルーエ国立音楽大学を首席で卒業。日本音楽コンクール優勝ほか、英バルビローリ国際コンクール、日本管打楽器コンクールで入賞。ベルリン・フィルのエキストラ奏者として活躍後、シュトゥットガルト国立歌劇場管の首席奏者を経て2000年からマラー室内管首席奏者として欧州を中心に演奏活動を行う。クラウドイオ・アバドをはじめ(共演200回以上)、ギュンター・ヴァント、ニコラウス・アーノクール、ピエール・ブーレーズ、ダニエル・ハーディングといった巨匠の指揮で演奏を重ねる一方、欧州の主要オーケストラ、アンサンブルから頻繁に客演首席奏者として招かれている。ソロや室内楽でも精力的な活動を展開し、テツラフ弦楽四重奏団、レイフ・オヴェ・アンスネス(ピアノ)、マーティン・フロスト(クラリネット)らと共演。ニューヨークのマンハッタン音楽院、イギリス、スペイン、ドイツ、コロンビア、ベネズエラなどでマスタークラス教授として招かれ、後進の指導にあたる。2015年より、レゾナンス(鎌倉の響き)コンサートシリーズを主宰。東京藝術大学准教授。ルツェルン祝祭管設立メンバー。第49回JXTG音楽賞(現ENEOS音楽賞)奨励賞受賞。鎌倉市出身・在住。

After enrolling at Tokyo University of the Arts, Mizuho Yoshii moved to Germany to study at the University of Music Karlsruhe, from which she graduated with distinction. As principal oboist of the Mahler Chamber Orchestra, she has been performing mainly in Europe since 2000. She has worked closely with the conductors such as Abbado, Wand, Harmoncourt, Boulez, and Harding. She is also an active chamber musician and soloist in Japan and abroad. Mizuho Yoshii is associate professor of oboe at Tokyo University of the Arts. She was awarded the 49th JXTG music prize (current ENEOS music prize) in 2019.

10.23 金 第389回 定期演奏会

10.23 金 第389回 定期演奏会

堀 朋平 (音楽学者・西南学院大学講師)

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (1756-1791) 歌劇「後宮からの誘拐」K.384, 序曲

故郷ザルツブルクから、25歳でウィーンに出たモーツァルト。晴れて「自由な作曲家」となった青年がいちばん望んだのは、ここ皇帝の膝元でオペラをヒットさせることだった。女帝マリア・テレジアが歿したことで矢継ぎ早の改革を進めたヨーゼフ2世は、勢い込んで自国語オペラの推進にとりかかる(1780年)。この波に乗って書かれたのが3幕からなる《後宮からの誘拐》、ウィーンに移り住んで初となるオペラである。

若い主人公ベルモンテは、トルコの後宮に誘拐された恋人を救出しにいくも捕えられ、結局トルコの太守の慈悲によって赦される。恐ろしいトルコ人——それは当時のヨーロッパ人にとって脅威とスリルの源泉だった。音楽の「トルコらしさ」は、派手な軍楽を模す打楽器の活躍と、シンプルな短調和音の連続で表された。この序曲冒頭で鳴る勇ましいシンバルを聴いた人々は「あ、トルコものだ」とはっきり感じ取っただろう。不意に鎮まって短調の和音を刻む中間部も、かの異国を彷彿とさせる。これは、やがて聴かれるベルモンテのアリア「ここで君に会えるはずだ」(第1幕)の変奏である。聴衆の反応を想像しながら筆を進めるのは、モーツァルトの大いに好むところだった。

作曲/オペラ全体は1781年7月30日から翌年5月末まで 初演/1782年7月16日、ウィーンのブルク劇場にて編成/フルート1(ピッコロ持ち替え)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、トライアングル、シンバル、バスターム、弦5部
使用楽譜/ペーレンライター

リヒャルト・シュトラウス(1864-1949) オーボエ協奏曲 二長調 AV.144

モーツァルトらしさを誰より大切に「懐古」した作曲家、それがリヒャルト・シュトラウスである。よき伝統が息づく街ミュンヘンに生まれ、作曲で大きな財を築くも、2つの世界大戦を生き抜いた彼は、ナチスに侮蔑されつつ晩年を迎えた。財産を接収されたこともあった。その活躍期は、シェンベルクやストラヴィンスキーらの台頭によって音楽が揺れ動いた時期と重なる。そんな時期にあってシュトラウスは(ときに前衛に手を染めるも)古きよき世界を夢想した。

その中心ジャンルは交響詩とオペラだから、器楽が色あせてみえるのも事実である。だが、激動のキャリアを経て書かれ、単一楽器のための協奏曲としては最終作となる本作では、まるで交響詩の登場人物が動きだし、微笑みを浮かべて人生を振り返るような一幕が展開される。楽譜には複縦線はあるものの楽章の切れ目は記されていない。つまり休みなく演奏されるが、全体はほぼ3つの楽章に分かれる(4つに分けられる場合もある)。

第1楽章 かつての自作、たとえば《ドン・キホーテ》を思わせるユーモラスな主題は、提示部のソロだけでなんと15回、どれも同じ形をとらずに変奏曲のごとく姿を変えつつ現れる。広がるのは、なんとも透明な諦念だ。

第2楽章 なかなか3拍子と分からない、無限旋律のようなテーマが沁みる。後半ではイングリッシュホルン(大型のオーボエで音も低い)とオーボエの掛け合いに耳をすませたい。カデンツァ(即興)は作曲者による。

第3楽章 今度はヨーデル風のテーマが、またイングリッシュホルンと絡みあって伸びやかに響く。ふたたびカデンツァが置かれる。

最後に晴れやかなダンスが続く。おしまい近くにはオーボエとイングリッシュホルンが足並みそろえ、夫婦のように仲良く踊る。どこか《英雄の生涯》のラストを思わせずにいない。

作曲/1945年 初演/1946年2月26日チューリヒにて。オーボエ独奏M.サイエ、指揮F.アンドレーエ、チューリヒ・トーンハレ管弦楽団 編成/フルート2、イングリッシュホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、弦5部、独奏オーボエ
使用楽譜/フージー&ホークス

フェリックス・メンデルスゾーン(1809-1847) 交響曲 第3番 イ短調 作品56「スコットランド」

おしまいに、シュトラウスの愛した作曲家のシンフォニーで、物悲しくも涼やかな北海に想いを馳せたい。「20歳」という年齢は当時も大きな節目だった。成人を迎えたメンデルスゾーンは、あふれる知識欲と財産を活かして国外への教養旅行に出かける。イングランドからスコットランド、さらに西に広がるヘブリディーズ諸島へ……。エディンバラに着いたのは7月26日。その4日後に着想が兆したようだ。その晩には、序奏のスケッチと家族への手紙が書かれた。その一節を少し注意深く読んでみよう。

「……夕方おそく、私たちは、メアリー女王が住み、愛を営んだ宮殿へ行きました。……礼拝堂はもう屋根がなく、草やツタが生い茂っています。その壊れた祭壇の前で、メアリーはスコットランド女王の位に就いたのです。そこではすべてが壊れ、朽ちています。明るい空の光が差し込んでいます。思うに私は今日そこで、交響曲「スコットランド」の出だしを見つけました」。

「メアリー」とは政争に巻き込まれて1587年に刑死したメアリー・スチュアートのこと。シラーの戯曲によって当時よく知られていた。そして「草やツタ」の這う廃墟。つまり自分の音楽の靈感は、滅びゆく人間と永続する植物——歴史と自然——にある、とメンデルスゾーンは主張しているのである。個を越えた時空を大切に作る作曲家による、音楽哲学の表明といえよう。作品が仕上げられたのはだいぶ後、ラ

イプツィヒのゲヴァントハウス管弦楽団に着任して多忙な日々を送るようになってからのことである。集中して聴き通してくれることを願って、初版には「全楽章を切れ目なく演奏するように」と記されている。

第1楽章の暗い音作りは、逆巻く北海を思わせる。「イ短調」は、粗野な響きを発するため交響曲ではほとんど用いられない調だ。

第2楽章のテーマは、スコットランド民謡の五音音階からなる。

第3楽章は厳かな行進曲。メアリー王妃への哀歌とみる解釈がある。

第4楽章は「好戦的に」という指示を持ち、荒々しいフーガが繰り返されるが、やがて宗教的な讃歌(ソラード)で高らかに閉じられる。

作曲/1829年夏。1842年1月20日完成、翌年まで改稿 初演/1842年3月3日、ライブツィヒのゲヴァントハウスにて、作曲者の指揮 編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット 2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦5部
使用楽譜/ブライトコプフ&ヘルテル

※編成は使用楽譜に基づくもので演奏の都合上、異なる場合がございます。ご了承ください。

★コンサートピアノ等の調律・修理・調整・販売
★ラグジュアリーミュージックサロンレンタル

Claviart

★コンサートピアノ調律師
武内喜美郎
スタインウェイライセンス認定技術者

★クラヴィアート音楽館
レンタルスペース&音楽教室
スタインウェイピアノ設置

★スタインウェイピアノ椅子
ポールジャンセンコンサートベンチ
修理サービス

※新型コロナウイルス感染予防対策実施中

有限会社クラヴィアート 〒839-0824 福岡県久留米市善導寺町飯田 550-2
TEL 0942-47-5555 URL <https://www.claviart.com/>

コンサートをお楽しみいただくために

携帯電話の電源を
お切りください。



マナーモードでも、作動しますと近くの方が気になる場合がございます。その他にも、アラーム付き腕時計など、音が鳴らないようご注意ください。

Before the performance, you must not forget to turn off your mobile phone. Even when it is set on silent mode, if it vibrates it may disturb people around you. Please also make sure that your wristwatch alarm, and any other electronic devices, do not make any noise.

撮影、録音は
お断りいたします。



開演中の写真撮影、録音、録画は堅くお断りいたします。

No photography, filming and recording are allowed. All use of cameras and recording equipment is strictly forbidden throughout the performance.

補聴器のご利用には
ご注意ください。



補聴器を正しく装着されていない場合、音を発する場合がございます。音漏れがないよう、しっかりと装着し、適切な音量に調整をお願いいたします。

For our guests who use a hearing aid, please insert the device carefully. If you do not do so properly, it may emit a noise. Please check that it is firmly attached and set at a suitable volume.

演奏は
最後の余韻まで
お楽しみください。



多くの演奏家は、最後の音の余韻が消えるまで集中を保っています。一瞬の静寂の後の怒涛の拍手は、感動を何倍にも味わえます。拍手や「ブラボー」の掛け声などのタイミングには、お心遣いをいただきますよう、お願いします。

※感染予防対策のため、現時点では、ブラボー等の声援は控えていただくようお願いしております。

Please enjoy the entire performance until the last lingering sound fades out. Most musicians playing in an orchestra maintain high concentration until that point. Your loud applause after a moment of silence will contribute towards a much more impressive ending to the performance, for everyone concerned. Bearing this in mind, please take care to choose the right timing to applaud and cheer (for example, "Bravo!").



九州交響楽団は、上記のマナーアップに取り組んでいます。
皆様のご協力をお願い申し上げます。

The Kyushu Symphony Orchestra is endeavouring to raise awareness of good manners, such as those we have outlined above, in order to enhance the concert experience for everyone. Thank you in advance for your understanding and compliance.